

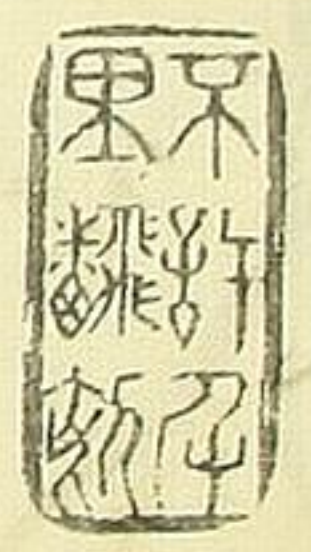
西洋道中膝栗毛

二編
上



A750
3

假名垣魯文戲著



萬國

航海

西洋道中膝栗毛

東京書肆

萬笈閣



西洋道中膝栗毛二編自序

歌人の居あがら名所を知る。諸家の記行の道

案内方角抄小指りの。際略斯と悟れがある。座

さん杖の手に圖會を披きゆを。踏出を足曳の。

やまと詞が學の初旅麓の塵秘事並木のす川

毛三鳥傳授歌枕。諸國を巡りく猿丸と。

西洋道中

48-9765

化人磨も多る中に。和歌と元来西洋の地理
 も事情もあつぬむの。はくし小盡を戯作活
 業も。文博士が著される。旅案内を祭として
 前々此書の初編を終り。彼蟹文字の横濱
 を。首途は筆の杖突乃の字。次輯の趣向小
 草卧果出帆遅滞を促され。沖の暗いよ今更

航海夫退いて唯る。鉄炮をみるのそが中ふも。
 虚く出たる實がるわく。方今の時好は叶ひ生
 せぬ。文盲を助かる大福長者が。翻譯書を路
 用して。乗組む蒸氣飛脚船。一日本國の
 肺色を捨置き。知らぬ異國で苦勞する。人真
 似猿の心。意馬の粟毛を礎にして居る。

海外万里の情を穿つも聞多風土の境界

滑稽稿と鶏が啼東訛りの横啞へ煙管の

口から出へるめの烟小等類も根無草上海

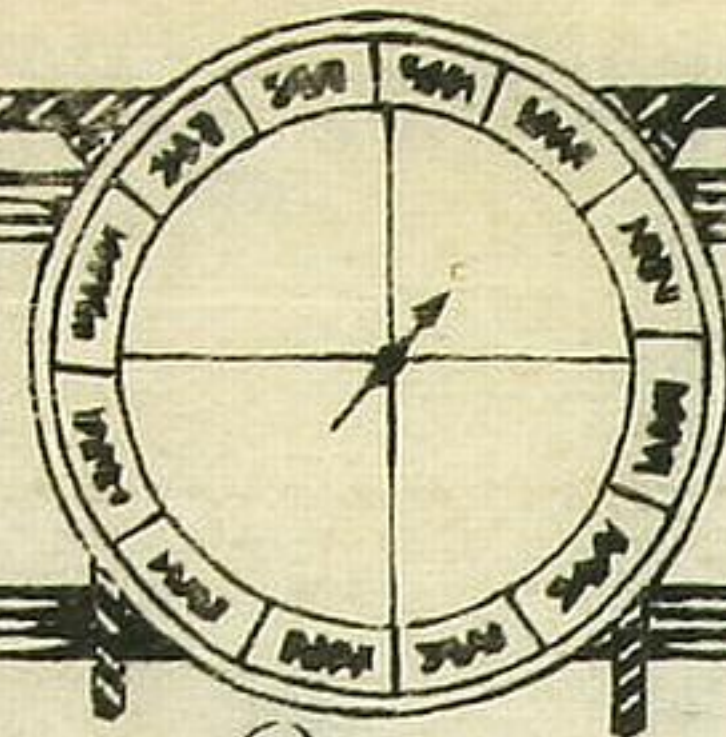
辺で碇を下し。先一服と毫を閣く

明治龍集庚午冬閏十月吉且

氷湖堂 假名垣魯文戲題

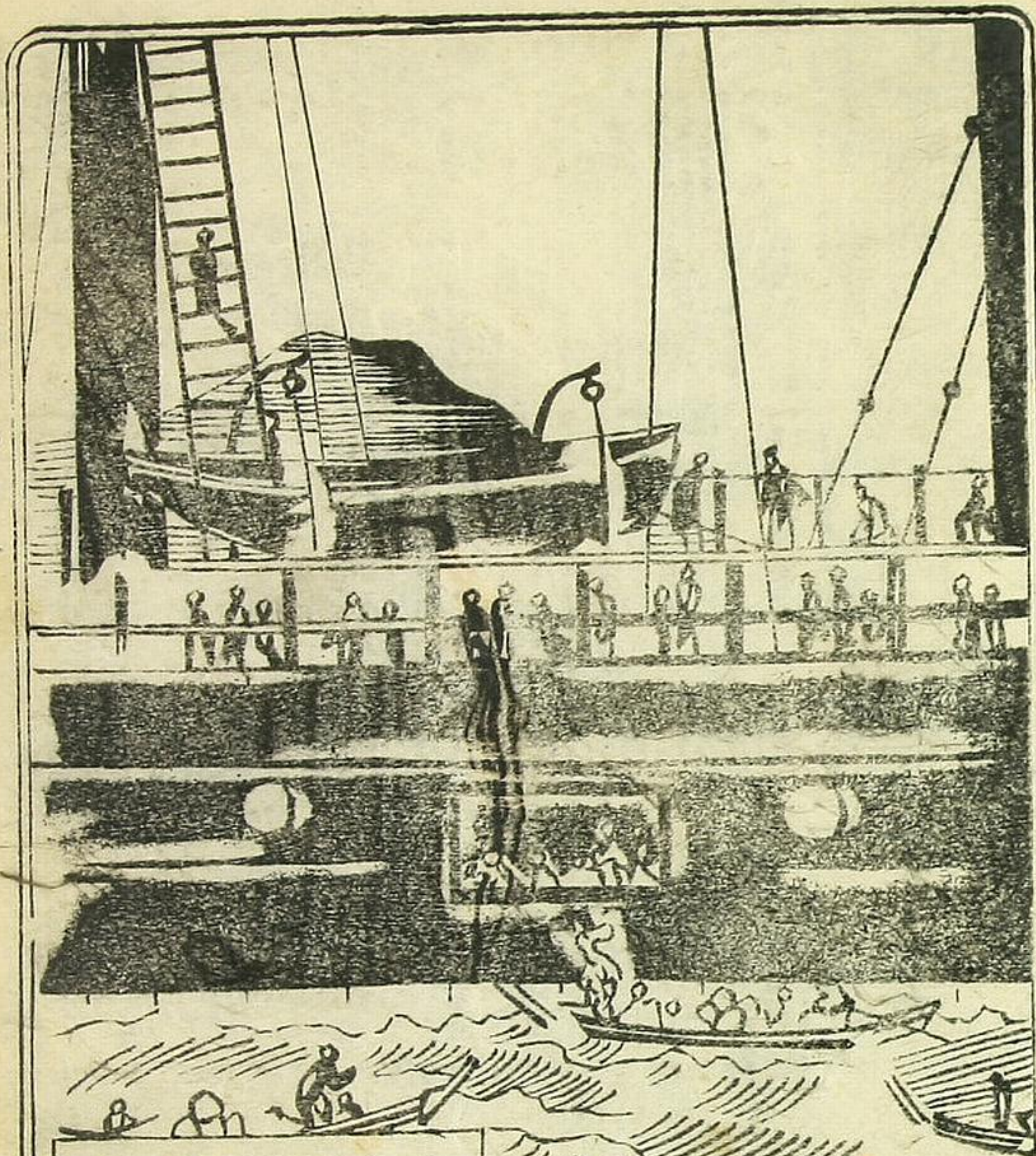


附言



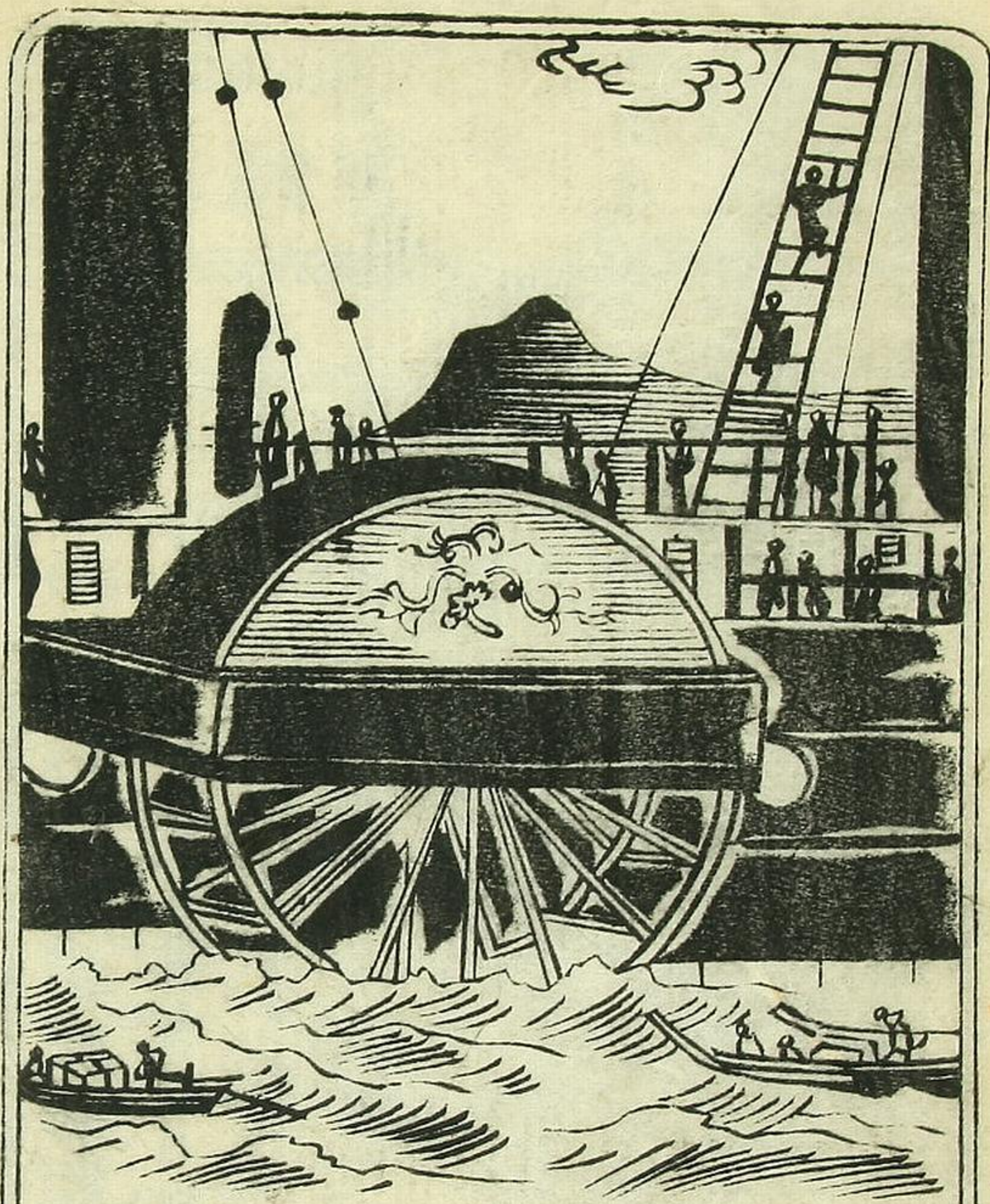
凡例

○當編ハ横濱の高個大腹屋廣蔵といへる人物を作り設けて彼が英吉利の龍頭を博覽會へ発向を以て大意とを因て上海香港小渡海歐羅巴小航海の航路ハ印度海飛脚船の通行を假てり之のせり
○友人砂燕子先年佛蘭西の博覽會小至り彼国の風土大槩を得たり故小彼人の一夕話聊耳底小止めたるを柱礎としし此書を綴りけりんと砂燕子目今東京に住せども故よ尋問の路を断遺憾甚し



や 弥次郎北八等
ぶうきい 煎氣飛脚船
りき 衆組横濱沖
より出帆の圖

船に居て
ふんば
陸し
重の船
龍吟



てれくふ
かけしと
まの
なる
海路
たるふ
たる
ひくや
るを
魯
文

航海 西洋道中 藤栗毛二編上

東京

假名垣魯文戯著

去程小弥次郎北八の二個の着の被大後屋廣義は不計
 途中どあのこ牡丹餅よりも最佳き英國航海の相
 談よ高座の難儀もちろ志を疾大船へ乗つて音とてその
 上酒橋小波尾の流合あつて路の身の上をもろあ
 うゝあるべ定めぬ仕度をも惜まふえ森山氣の大版屋
 巨細を看込我家に傳ひ次の日店清親合ある後海



一蕙齋
 芳幾筆

北八

西遊記 第二十一回
五
屋坤平が許し合彼女房等の焼切とさるをりつけて
近辺の債目の片も出ぐすまじ是より弥次郎北八を
家留めき博覧會へ赴く酒をを伴ひてよその
年二月の中旬頃仕合酒以吉日を選びて當港を
出帆の人較り至漫男女を合し一馬九十四五人印度
海の定飛御彼蒸氣船の便置を得く横濱の地を踏
えり支那へ渡えり上海を目的とすといふ事ありしれ
作者曰海上通路都て船中の無理あり西洋旅客

内小番しければ茲に贅せむ航海の便置を泊んと
歌さば彼書を披きし藤原を知る者一淋瀝の
唯見戯を要とす
新く大坂屋敷をとりて弥次郎北八等が集り
たる異船の疾ことさあがら翼風の如く首途の後施
多き消ぬれをりも本牧の沖を放き石炭の棚り
の雲に混れ轍の巡りの煉爐を挽きさる船より將小
西哲奇巧の大船遠く彫れば鯨兎の潮を吹りと

疑ひ遠く重あが叢山の涌あがるかと怪する内海の
 浪程あるも大洋よふれば逆波天を覆ひ海潮の雲さ
 心耳を穿かぶりじよ彼大坂屋廣花の是れを統海
 直三愛船中の揺るも知るべしとのと驚く氣色もあけ
 れど弥次北八をとりめしその余の男女大藤の音も魂
 も身よ海にまじり一日二日の食事之間よ通らざり
 ざあ花結して為る紀つ直夜の分ち更なるあくまを
 る船の海上安全を事一の行りく港よ入を来るとして

在るうち順風ふせせに兵隊船ある紳士小若て
 磯をおろし爰て法皇を求めんと一書の上陸し初め
 て安堵の思ひを寄せば弥次北八の物さりの者も水
 小舟をひきき人々と船見え合せ
 石炭の烟ふまうまう一葉合の
 のおせくおあうませんちの縁
 弥次郎新あん真じけま北八もあつあつ
 正産のかりふあつるひとくぐら

神の四國よまめらぎの民

船く大板屋の二門ハ神戸小鳴江長崎屋を藤花
 と定めく被知小至るに夜ハりのぐと物とり夜ふ
 二三日逗留し再び船よ糸組と船西けしく肥前ある
 長崎へも立よりて又二三日を遊たりしうが自玉の周
 事全く個ひ糸合一同海船小あれは返く事も平
 ぎ暴風の難も多く支那の領北の上海へ着くは
 絶ドロくドラン引ふま「ひい〜〜〜引

前の條神戸長崎の逗留中種々の清穢あれ
 ども海外異境の穢活遅多らんことを惟ひく
 一是宛よ支那の地ふ後海せり

柳支那の上海ハ我様濱より行程ハ百里ハ日路と
 徑て達し波南系と距こと七十餘里と波〜〜揚
 子江とり又大河の口ある繁昌の港ハして人の數二十万
 西洋諸國の高賣船支那の小船も多〜出入市中
 小城の様あり古歴三國の時異の孫權が滬張あり

建安城と号るとぞされハ糸組の日中人等ハ祝施の
 命圖一應じ異人の案内小物も上陸する小徳て
 の人情何國とも異あると云く男ふハ老る初き
 と選びて皆しくちやんくけし坊主女まじりる見物
 殺人物より濟いそぞろくどやくく
 東洋人日本
 人ト雲霧の如く附添ひ来たりの花後おむらがる性来
 もふさがるむらり 辺合ふ一藝園の異人馬鞭と振丸石
 の人と追逃けつち小まき行征し日本の男女等ハ

目るれぬ風土家作りを足歩折中糸以北ハのふり
 も同くききろくく 暇ドウダハ天王寺墓石橋を
 ろるやうな天窓をまやアろくくちちろくの姿があじい
 とろくそゆるハろくくゆるて指をはして知やアがるせりめく
 ちの北 ちろくくゆる知らぬ他國のヲやく 知らぬちろく
 弥治さんあめハの天窓のいぬハ禪宗増直の指ッてぬる
 如窓の中ふ指がとろろを巻てぬらア 指ッアアありやア
 先刻指が着くと死屍解をつらて作のけふひつろけえ



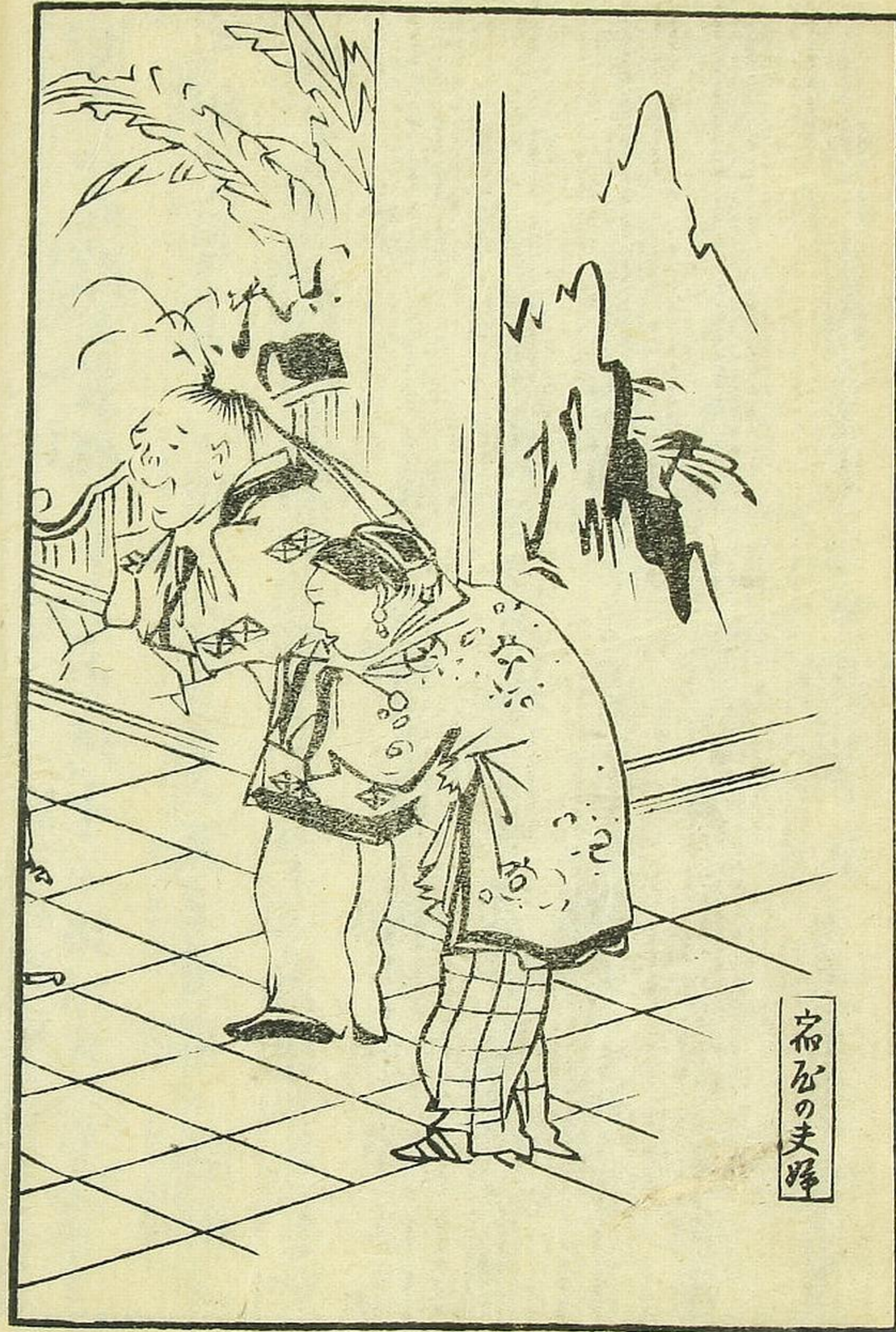
おちやま

跡取

北八

ひらね

おちやま



おちやまの夫婦

伏見町の平次尾張へ止者として此の刺者もたつこの女
 よしとこれ北五くやらあつてさうするゆへにさし向の
 阿波も移るさふも長えせと強つてゐる女郎の強らぞ
 仕舞つておるといつてお茶炊を五人揚ご部分即朱の
 玉のあめくはから出ることだらう刺者あやかけられぬ
 跡てめも強者ふことさよりんご遊びの席の五一
 三六ごたえは藝者不脱者と出る者が一人りの腰
 ごとつてへい今晚の皆さんあつてさうとれさるやア一産

の天窓へかゝる環屈でもあげの女郎がてめとあらの合妓
 お金山さん高窓さんすまませんよと云葉の札を述る
 からあやア刺者のあつてさうとれさるやア一産
 をつてさうさう一かふねの余計もさうでもさうあや
 ぬらト あつて北八ギツクリしてさうと北 せんあつたれが女郎あが
 三度目のかり合をさるべりやアがつてあつてあつて
 上三度目 あつて北八ギツクリしてさうと北 せんあつたれが女郎あが
 下三度目 あつて北八ギツクリしてさうと北 せんあつたれが女郎あが
 とれさるやア あつて北八ギツクリしてさうと北 せんあつたれが女郎あが



弥次郎

乙子屋

百羊庚三二上

十二



西の洋子 申の理
 波志津さるん
 うのれは
 ちさとの縁を
 むねさかたの如

北八

西洋果毛三上

十一

まじららの金^{きん}が税^{ぜい}走^{そう}しつとらふのさアイトク^北 十
 分^{ぶん}もねく自分^{自分}が身^みふつけくあんじつへるんで大切^{大切}
 けろかくののを落^おちまやうがあるのうよくさびして
 えねたれとあせもあつやアあねろ^強 ヲット出^で
 てる様^様の骨^{かほ}をぶつるまた金玉^{きんぎよ}もびつらじつと
 えて上の方^{かた}へ物^{もの}上^{うへ}つこのさゆうくえく酒^{さけ}まら
 のせまぐ一^ひト安^{あん}堵^どへあぶるさうも様^様がアイタク^唐 ライト
 添^よぬとどろしつとらふのさあめくが仕^し出^でしつとら

自分^{自分}のからをらつめるの仕^しまがねくがふちやこの
 様^様ツ後^{あと}を踏^ふ上^{うへ}このを様^様を發^はして半^{はん}死^し半^{はん}生^{せい}ダその上
 杯^{たい}盤^{ばん}やガラスをぶちこじつり座^ざ中^{ちゆう}をゆつらけ
 じつ僕^{ぼく}金ををらつらるる志^しれやア志^しね^ねトウ世^{せい}後^ご
 くらか前^{まえ}酒^{さけ}の吞^のせね^ねト^トんをさされてのあめを
 かきあつらふとつしき^か北^北八^八の弥^や次^じ席^{せき}の面^{めん}目^めをげは傍^{かたわら}まき
 みるるをえるよりかじく^北 目^めシ親^{おや}方^{かた}一^{いち}首^{くび}うらみやした
 橋^{はし}のまねをすべからぬの強^{ちやう}障^{じやう}子^し

